

Title	Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities. Preed under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937.
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.1 (1939. 1) ,p.127(127)- 132(132)
JaLC DOI	10.14991/001.19390101-0127
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の間)の貿易關係の密接化の條件は既に準備されて居たので、容易にこれが實現され得たと云ふ。そしてその所以を、一八六三―七一年に於ける輸出減退と七十一―七七年の回復とに對比して論證する。

シユロオテ氏はこの最後の章に於いて、大戦前後の英吉利の對英帝國貿易を比較するに際し、戦後の英帝國が、戦前に比してその領域を擴大して居ることに留意すべきを特に強調する。即ち舊獨逸植民地の大部分、舊土古耳領の一部(パレスチナ)及びスダンが新たに歸屬して居る點、従つて今迄多く用ゐられて居た統計數字の訂正を要する點である。その訂正の結果は、本書一〇〇頁と一七二―三頁との兩統計表に示されて居るが、本國の貿易總額に占める英帝國の割合は幾らか減少する。然し前述の兩者間の密接化傾向には變りはない。尙この地域的變化と共に、英吉利の對植民地貿易の商品別關係も變つて來て居る。これは諸植民地の經濟發達の然らしめるところであるが、シユロオテ氏はこの點も亦、個々の植民地とその本國との貿易商品に就いて詳細に説いて居る。私はその中英領印度から本國向け輸出される原棉の數量、その價格、英吉利の棉花輸入總額に於いて占める比率等の數字を若干掲げて、以てこの紹介文を終る。本書は最初にも述べたやうに、統計資料集として意義を持つものである。即ち本書執筆の第一の目的の爲めの材料の蒐集が根幹を爲して居り、それ等(恐慌の意義乃至景氣變動論の検討)の爲めの研究者の手引として役立つものと考へられるのである。著者が集計した數字は、キールの世界經濟研究所の名に於いて信頼してよいものであらう。

一八五四―五七年	一九一―一三年	一九二七―二九年	一九三二―三四年
一五七二千(インディアン)	五五七	七四六	九四四
一六四二千	一二二六	三八二六	三二五三
一八・七	二・六	五・五	八・〇

Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities.
Prepared under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937.

小島 榮次

特定地域の過去及び現在を研究して、將來その地域に分布すべき諸現象に就いての可能性を明かにすることは、他の諸方面の學者と共に地理學研究者にも課せられる一つの實用的任務である。殊に現在の人口が稀薄な地域従つてまた諸種社會現象の複雑多岐な分布を持たぬ地域や、或はまた人口が稠密であつても經濟的發展が著しく後れ自然的資源の開發が極めて不十分な地域に就いての斯かる研究に於いては、地理學的研究が先づ第一に必要である。蓋し人口が稠密で經濟的發展の高度に達した地域に於いては、そこに出來上つて居る經濟その他諸方面の生活が、大體に於いてその地域の自然的資源を十分利用しつゝある結果であるか、或は少くともそれ等資源を十分知悉して居る結果であると看做され得るのであり、従つてその地域に於ける社會現象の現狀に基いて或る程度まで將來の豫測を行ひ得る。然るに人口稀薄な地域や經濟的發展の後れた地域に於ける社會現象は斯かる性質を持たぬが故に、常に必ずその地域の自然的及び社會的要因を考究することから出發せねばならない。

地理學研究者にとつても、若し斯かる任務を十分に果し得るならば研究者として大なる喜びに相違ない。然し乍
Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities.
Prepared under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937. 一二六 (一二六)

らこの仕事には極めて大なる困難の伴ふことも明白である。殊に将来の人口分布乃至は人口収容能力の研究の如きは、それに關聯する問題が廣汎であり複雑であつて、最も困難な仕事と云ふことが出来やう。こゝに紹介するバウマン編纂、移住地開拓の限界―現在認めらるゝ可能性に就いての一報告は即ちこの困難な仕事を企てたものであつて、主として米國の地理學者から成る十人の研究者が諸種項目を分擔研究した結果を收載して居る。その十篇のうち一般的考察に關するものが二篇、加奈陀・西比利亞・濠洲・阿弗利加・南米・支那人移住先・並びに本邦人移住先の人口収容力を取扱ふものが七篇、「亞細亞人移民の主要源泉」に關するものが一篇含まれて居る。

一般的考察の二篇のうち「人口再分布の前途」(Carl O. Sauer)は、近世に於ける大量移住を可能ならしめたが如き埋藏資源の新発見及び農作物の移植は最早將來に於いて繰り返される見込みがなく、また灌漑及び開拓に依る新耕地の獲得も、巨額の費用を要するメソポタミア及び南米諸地方を除いては大規模なものが残されて居ない等の理由から、國際的な大量移住は將來に於いて起こりさうもないと結論して居る。勿論農業技術の進歩や熱帯森林の開墾或はまた衛生事業の普及等に依つて、從來農業の分布しなかつた寒帯及び熱帯諸地方に農業を分布せしめることも可能であるが、これ等事業は極めて徐々にしか進捗しないし、従つて地元居住民或はその附近の人口の増加乃至移住を見るとしても、國際的な大量移住を生ぜしめないと云ふ。また「移住過程に於ける食料供給」(Carl L. Alsborg)は、移住民の食料生産上及び消費上の慣習・移住先の自然的條件に依る食料生産への制約等の觀察から、移民の可能性を考究して居る。極寒の爲め或は乾燥の爲めに開發不可能な土地を除くと、結局開拓可能な土地は、半乾燥地帯・乾濕兩季を有する高温地方・濕潤熱帯森林の三種に分けられる。既耕地にこれ等可耕地を合すると全世界で約一千万平方哩となり、世界人口を二〇億とすれば、平均一人當り約三エーカーの耕地に相當する。現在の既耕地は平均

一人當り二エーカーにも達しないのだから、未墾可耕地は大なる人口を支へる餘裕を持つわけである。然し乍ら右に挙げた三種の可耕地帯は、夫々その生産し得る食料を異にし、従つて各國民の食料生産上及び消費上の慣習とそれが合致しない場合には移住が比較的困難となる。半乾燥地帯は麥類及び雜穀・肉類・牛乳・等を生産し、人口過剰な温帯居住民の移住に適しては居るが、他方その農業は單位面積からの收穫が少いから、一人當りの收穫高を大ならしめようとすれば、機械その他に巨額の資本を投じて大なる面積を耕作せねばならぬ。濕潤熱帯森林の食料は主として果實類で、穀類では米はあるが麥類はなく、肉類もない。従つて温帯居住民としては日本人が移住するに有利である。乾濕兩季を有する高温地方は既に現地に居住する印度人・南部支那人・比律賓人・東部ブラジル人等に依つて、部分的に極めて人口稠密な農業地帯が作られて居り、未開拓地も多くは恐らくこれ等の土着人に依つて開かれるであらう。この地域は米・珈琲・カオ・茶・甘蔗糖・果實の他、麥類を産する場所も含まれて居るが、大體に於いて小面積の土地から多量の收穫を擧げる農業が行はれて居り、従つて歐洲人が農民として移住することは困難である。最後にこの地帯に於ける土着民の増加が移住民に對して大なる脅威となる可能性のあることを指摘し、諸種の方法に依つて土着民の生産力を高め、生活標準を向上せしむることが最善の對策だと主張して居る點は、吾々日本人にとつて特に興味が深い。即ち土着民の生活標準を向上させれば、人口はそれ程脅威的な増加を來たさないと云ふのである。但しこの論文が工業用作物を無視し食用作物の栽培のみを農業となすが如く取扱つて居ることは、重大な缺陷として擧げねばなるまい。

地域別の研究七篇のうち支那人移住先を取扱つた「支那移民に關する現在の見透し」(Chen Hai-sang)は、從來の移民の歴史・支那移民に對する各國の制限・移住先に於ける經濟的地位殊に日本人及びジャヴァ人等との競争に就い

て主として述べて居るに止まるが、他の六篇は夫々各地域の自然的及び社會的條件に基いて、將來の人口収容力を豫測して居る。その個々の内容を紹介することは省略するが、「日本移民事業及び植民事業」(Karl J. Peter)はやはり興味を引く。これは先づ最初に本邦に於ける人口問題及びその對策の概要を述べ、内外地に對する移民事業の沿革・移住先の人口収容力を論じて、太平洋に於ける英・米・佛・蘭各國の領土を日本の資本と移民とに開放することが、太平洋に於ける生産・交易を増大せしめるに役立つ現存する摩擦と緊張の緩和を齎し得ると結論して居る。本邦農業の性質や過去の移民成績から見ても本邦移民に好適な移住先は南方にありとし、特に南洋諸島及び太平洋諸島を重視して居る點は、前掲のアルスバークの見解とも一致する。本邦に於いて目下注目されて居る對滿移民事業は餘り十分に取扱はれて居ないが、それでも支那人が日本農民よりも低廉な生活費で生活し得ることは眞實である。殊に農村建設の當初の期間に於いて然りである。然しその後の日本農民は、殊に協同組合的基礎の上に組織され且つ農業指導者に指導された際には、支那人と競争し得る筈である。支那人からの競争といふ要因は恐らく過大視されて居る。(一六九—一七〇頁)と云つて居るのは注意に値する。

これに反して「亞細亞人移民の主要源泉」(Owen Lattimore)が、日本の發展は「日本農業の工業への從屬を要求する。この理由で、領土擴大及び征服の成功があつてすら、日本に於ける生活標準を著しく向上せしめる結果を齎し得ない。(中略)支那から奪つた地方を日本に於ける標準以上に引上げるとは決してしないから、滿洲に於ける支那農民の狀態は日本國內の日本農民のそれより低くすら止まつて居なければならず、これはまた滿洲に移住せしめる爲めに日本から農民を連れて來る理由の無いことを意味する。従つて滿洲に於いて必要と考へられるが如き新しい植民は、支那に於ける饑飢地方から引續き募集されねばならぬ。」(一三三頁)と云つて居るのは、考察が不十分と

云ふべきであらう。而してこの論者が移住の過程を以つて、移住先の自然的條件や移民の人種的特質に關聯なく、全く經濟的及び政治的原因に依るとして居ることも行過ぎである。蓋し移住が起るものは、根本的には經濟的及び政治的原因に基くに相違ないとしても、その移住の行はれる態様が前掲の諸篇に扱はれて居るやうに、移住先の自然的條件や移民の人種的特質に左右されることも明白だからである。斯くしてこの一篇が本書中に收載されて居るのは、本書の題目から云つて聊か應はしくないと思はれる。

然し乍ら残る五篇即ち「移住地域としての加奈陀」(W. A. Mackintosh)「ソ聯邦に於ける人口要素」(Bruce Hopper)「濠洲に於ける移住可能性」(Griffith Taylor)「阿弗利加に於ける移住可能性」(J. H. Wellington)「南米に於ける移住可能性」(Isaiah Bowman)は、いづれも興味深い研究であり、殊にテーラーの濠洲に關するそれは、自然的及び社會的條件の詳細精密な考究に豊富な學殖と克明な研究心を示して居り、誠に地理學的研究の好標本とも云ひ得るものである。これに比すれば他の四篇は、その取扱ふ地域が餘りに廣大であり複雑性に富んで居るが爲めに、いきほひ詳細な敘述を困難とした點もあつて、聊か見劣りがする。

パウマンが緒言に於いて云つて居る通り、本書全篇を通じて得た結論は、「新しい土地は餘りに緩慢な且つ小さな人口の流れしか收容しないであらうから、その流れの發する國々にとつて眞に社會的重要性を持たない」(二頁)ことである。従つて將來の人口収容力が如何に大きくとも、當面の所謂人口過剩問題の解決としては、國際的移民事業はさ程重要でないと云へやう。殊に現在の如く政治的制限が甚しい場合一層然りである。然し乍ら人口過剩の問題は多種多様の方法を用ひて始めて解決さるべきもので、移民もその一つとして考へねばならず、斯く考へられる時それ相應の重要性を持つものとして研究の必要を認めざるを得ない。

Limits of Land Settlement. A Report on Present-day Possibilities.
Prepared under the direction of Isaiah Bowman. New York, 1937.

1311 (1311)

斯くの如く當面の世界的問題の解決方法として國際的移民事業が大なる重要性を持ち得ないことを明かにした點に、本書の價値を先づ認めねばならぬが、同時に或る程度まで各國內に於ける今後の經濟的發展の基礎を示すものとしても、本書の價値を認めることが出來やう。然し乍ら他方に於いて本書は、獨逸や伊太利に於ける國內移民事業を取扱つて居ない。しかも國際的移住が著しく制限され、また國內邊境地域の武装が重要視されて居る現在に於ては、國內移住がより一層緊切な場合がある。また本書は各國の人口收容力を考究するに當り、主として自然的條件及び現在の技術を前提とし、政治的・經濟的障礙を無視したのであるが、これは地理學的研究の性質上やむを得ない。將來の技術が如何に變化するか、政治上及び經濟上に如何なる變化が起こるか、而してそれ等が移民と如何なる關聯を持つか等の問題は、夫々他の學問の分野に屬する研究題目である。地理學的研究は實際の移民事業が如何に行はれるかを決定する基礎の一部分を明かにし得るに過ぎない。(vii+380 pages. Council on Foreign Affairs, New York. 發行、丸善賣價十二圓)(昭和十三年十二月二十七日)

松井清著「貿易理論の研究」

岩 田 仞

近年我國に於ても貿易理論の研究が漸次盛んになりつゝある。貿易現象の實證的分析に比しその理論的研究が非常に遲滞せる今日誠に慶賀すべき事である。殊にそれ等研究が主として少壯學徒の手に依つてなされ、その發展の將來性ある事を考へる時、喜ばしき限りである。此處に紹介せんとする「貿易理論の研究」の著者松井清氏も既に幾多の論作を發表され、先般ハーバラー著「國際貿易論」の翻譯を岡倉伯士氏と共に刊行された學究の人である。

本書は先づ「貿易理論の前提」の問題から始められてゐる。貿易理論の前提とは、國際間の交易が國內に於けるそれと如何なる點に於て異なるかを認識する事に依つて、貿易理論が獨立の分野を持ち特殊理論として成立するや否やの決定に關する問題である。之は從來國家の概念規定と云ふテーマの下に屢々論ぜられた。而してそれが貿易理論成立に關する基本的問題であるからして、著者が本書の序説として最初に論及されてゐる事は適宜の處置であると思ふ事が出来る。其處で検討の俎上にのせられてゐる見解は、リカード、ミル、ケアンズ等古典學派論者の「勞資の國內的移動性と國際的移動性」の區別、その亞流とも看做されるシッジウィックの「運送費の差異」、更に轉じてオイレンブルグ、レブケ等の「本位制の差異」の三者である。

松井清著「貿易理論の研究」

1313 (1313)